

## 令和2年度大島賞・CSA選考結果報告

褒賞選考部会  
委員長 猪阪善隆

大島賞は、若手研究者を対象に、将来、本邦の腎臓学研究のリーダーたりうる人材を顕彰することを目的に設けられている。第27回 令和2年度の大島賞選考部会は令和元年10月26日に行われた。今年度は7名の候補者の推薦があった。褒賞選考部会では、候補者の研究業績の質と広がり、および将来性などについて多岐にわたる熟議が行われ、以下の2名を大島賞に値するものとして理事会に推薦し、令和元年11月24日承認された。

### 大島賞

井上 剛氏 東京大学

研究主題「神経-免疫系を介した腎臓保護メカニズム」

井上氏は長崎大学卒業後、臨床研究を行ったのち、2009年東京大学大学院医学系研究科博士課程に入学し、シグナルクロストークがクロマチン構造変化を引き起こすことを見出すなど、エピジェネティクスに関連した研究を行った。その後、バージニア大学腎臓内科に留学し、腎疾患の病態解明において、免疫系に加えて神経生理学の概念を導入し、留学中および帰国後も神経-免疫系を介した新規の腎臓保護作用のメカニズムについて、次々と精力的な解明を行い、腎臓病態生理や次世代創薬に大きなインパクトを与え、腎臓病学研究の推進に貢献してきた。

以上のように井上氏はエピジェネティクスに関する研究のみならず、神経-免疫系を介した腎保護作用に関する基礎研究により優れた研究成果を出しており、今後の発展性も含めて大島賞に値すると評価された。

安藤 史顕氏 東京医科歯科大学

研究主題「腎臓集合管の病態生理機能の解明と先天性腎性尿崩症の治療法開発」

安藤氏は、東京医科歯科大学を卒業後、臨床研究を行った後、2013年同大学院博士課程に進学し、人体における水恒常性維持に必要なAQP2水チャネルの新規制御機構として、2つのAQP2活性化法(カルシニューリンを介する経路とPKAを直接活性化する経路)を見出した。またAQP2を活性化する低分子化合物を発見している。さらにトルバプタンの新しい機能も見出している。

以上のように安藤氏は腎臓集合管の水恒常性維持機構に重要なメカニズムの解明を行っており、将来の腎臓学研究のリーダーたりうる若手研究者として大島賞に値すると評価された。

## CSA

CSA(Clinical Science Award)は、本邦の腎臓学における臨床研究のリーダーたりうる中堅研究者を顕彰することを目的に新たに設けられた。第4回 令和2年度のCSA選考部会は令和元年10月26日に行われた。今年度は4名の候補者の推薦があった。褒章選考部会では、臨床研究について、手法の如何を問わず、結果として疾病、病態の診断、予後、治療等に直接的に結びつく研究と定義した上で、この定義に沿った研究成果とその継続性に着目して多岐にわたる熟議を行い、以下の1名をCSAに値するものとして理事会に推薦し、令和元年11月24日承認された。

**田中 茂氏 九州大学**

**研究主題「慢性腎臓病の病態解明を目指した臨床疫学コホートの推進」**

田中氏は、鹿児島大学卒業後、臨床研修を経たのち、2011年九州大学大学院博士課程に入学し、腎臓病に関する研究を行い、学位取得後も九州大学腎臓高血圧脳血管内科にて、診療・研究・教育に従事した。一貫してCKD患者を対象とするコホート研究に携わっており、IgA腎症から保存期CKD、血液透析患者を対象とした幅広く包括的な臨床疫学研究を行い、多くの成果を世界に向けて発信してきた。特に血液透析患者を対象としたQコホート研究や保存期CKDを対象としたFKR研究では診療プラクティスに寄与する研究を行った。

以上のように田中氏の業績はCKD・透析患者の臨床・研究に大きく貢献し、またTranslational Researchの専門家として今後も活躍が期待できる存在であることから、CSAに値するものと評価された。